

# 日本における「機能主義博物館論」の一展開 4

—伊藤寿朗博物館論の視点からみるその理論的問題—

栗 山 究

## 承 前

「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」は、木場一夫〔1949〕から鶴田総一郎〔1956〕へと継承された「博物館の内在的機能」と、本来的には歴史的因果性を付帯する「博物館の形態的諸要素」との間の共变的な相関関係の組み合わせにより、「博物館の形態的諸要素」を「博物館の内在的機能」のうちへ捉え返すことで「博物館の内在的機能」を指導させ、この「博物館の内在的機能」を目的化させる行為によって完成された。

しかし「博物館の内在的機能」の抽象化の延長に博物館を位置づける論理である「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」を自らに援用する博物館論者の論理展開の多くは、「博物館の内在的機能」と「博物館の形態的諸要素」との間には、確固たる共变的な相関関係が独立的に存立しているものと仮定されており、この両概念を制御する「歴史」や「社会」といった現実の諸過程による影響が考慮されることが少ない問題を、伊藤寿朗は以下の視点から捉え返していた。

「博物館というものを、単に資料だけとか、資料を中心に行なうのではなく、むしろ『形態』、『機能』として（中略）一応その館の生きた全体像が追求されていった点」は「基本的な意義をもちながら、だが同時にそれは多くの限界をもっていたのであった。」「その機能的な評価を目的論的に解消してしまったのである」〔3-3〕

### 理論自身において孤独な理論

「博物館それ自体をその内に確立するということが、すでに矛盾を含んでいたのであった。つまりそうすることによって博物館というもののもつ社会的意味というものが、機能主義的にしかとらえられなくなってしまうわけである。」〔2〕

### 現実の博物館に対して孤独な理論

「それは単なる概念上区別の問題ということだけではなしに、今日まで問われることのなかった。そして経験主義的に解消されていたところの、博物館活動の＜社会＞に対する分析と追求の弱さ、その困難性とも云えるであろう。」〔3-1〕

伊藤寿朗はこのように、自らの博物館論総体において、この「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」を「現実を見失なった目的論的な博物館学」[1]として把握し、「博物館学」が「技術・運営術」に転化されていく社会的事態に一貫して警鐘を鳴らし続けていたとも言える。

本稿では、前稿[栗山 2009]で提出した「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」を自らに援用する各博物館論者の受容過程において、伊藤寿朗博物館論が捉えていた鶴田総一郎「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」に内在する理論的陥穽、すなわち「機能主義博物館論批判」の中身を整理していくことを課題としている。

具体的には、前稿[栗山 2009]の【表 3】で整理した伊藤寿朗博物館論における「機能主義博物館論批判」の記述内容を基礎に、その問題の所在を分析的に解明するために提起した2つの視点のうち、本稿では「理論自身において孤独な理論」の視点に基づきながら展開していく。その際、「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」の理論的問題の所在を把握するための補助枠として、さしあたり【図 1】を参照しつつ、報告していきたい。

#### 機能主義博物館論（機能主義的規定法）：定義 A

##### 「博物館の内在的機能」の構造化の延長に博物館を位置づける論理

機能主義博物館論とは「博物館を構成する基本要素の機能を理念型として抽象化していく方法で、論者によって多少のズレと幅をもちながら、現在の博物館論にはほぼ共通した機能主義的方法である。」[12]「機能上の構成要素として、①調査・研究、②収集・保管、③公開・教育という、各基本機能（どのような項目に整理するかは、論者によって、また時代によって異なっている）相互の合理的関連を設定する。他方、形態上の構成要素として、①博物館資料、②博物館施設・設備、③博物館専門職員（学芸員）、④博物館職員、さらに⑤利用者・市民という、基本要素（どのような項目に整理するかは、論者によって、また時代によって異なっている）相互の合理的関連を設定する。この機能上の構成要素、形態上の構成要素の両者の関連と、その働きの仕方を、完成された理想的な姿である、理念型として抽象化することによって、博物館本来のあるべき姿、目標をつくりだしていく。そしてこのモデルとして想定された世界から、現実の博物館の世界を判断していくという博物館論である。」[1986: 251]「そして博物館の存在論的（目的的）な視点からすれば、機能的には社会普及という点が（中略）問題とされてきた。まさにこの点において博物館は社会教育機関として位置づけられてきたわけである。」[3-2]

#### 機能主義博物館論（機能主義的規定法）：定義 B

##### 「“ひと”と“もの”とを結びつける“はたらき”」（鶴田総一郎）を博物館の本質とする見方

機能主義博物館論とは「①各分野・各領域をもつ資料（情報も含む）を“もの”と抽象し、②社会的な諸関係に生きる人びとを“ひと”と抽象し、その属性や規定性を捨象する。さらに、③博物館の独自の役割を、この両者を結びつける“はたらき”とすることによってそのあり方を示そうという論理である。」[伊藤 1986: 251]「典型的には“ひと”と“もの”とを結びつける“はたらき”」（鶴田総一郎）を博物館の本質とする見方である。」[12]「形態的には“ひと”と“もの”とを結びつける『ところ』としての働きという点が問題とされていた。まさにこの点において博物館は社会教育機関として位置づけられてきたわけである。」[3-2]

#### 上述定義 B を「博物館学」とみなす場合

その定義は「いまだ学的検証の論理を内在化せず、したがって学的対象としては主観的なものにすぎないが、その独自の課題としては、形而下の資料を前提に、その『資料』それ自体の個性的研究成果と、その対象たる『ひと』それ自身の形成とを等価的に結びつけることであり、その方法・働きをも含む社会教育の独自の一分野を担う応用科学であることができる。」[8]

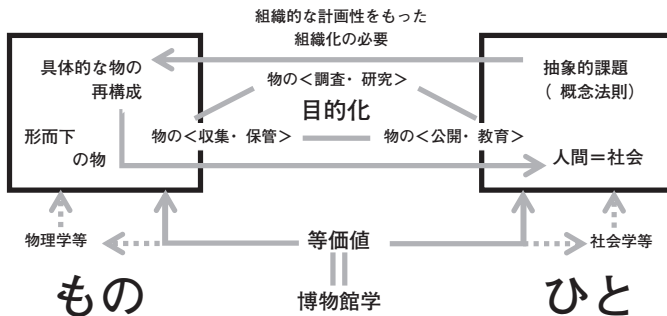


図1 「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」の理論的問題の所在を把握するための補助枠

注）左図は伊藤寿朗 [1982:4] の図「博物館学」よりその一部を抜粋のうえ「ひと」「もの」「目的化」の字を栗山において挿入したものである。上の機能主義博物館論の定義は、伊藤寿朗博物館論総体における「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」の定義 [3-2] [12] [伊藤 1986: 251] を総合して捉え、その定義を「博物館の内在的機能」と「博物館の形態的諸要素」とに分解させるかたちで、前者の文脈である定義 A と後者の文脈である定義 B とに分断化したものである。

## 1. 「博物館の内在的機能」の構造化の延長に博物館を位置づける論理の理論的陥穽

まずは【図1】で分節化した「定義A」に関連する位相の問題である。伊藤寿朗は「機能主義博物館論批判」の文脈において、「博物館の内在的機能」と「博物館の形態的諸要素」との間には確固たる独立的な共变的な相関関係が存在すると仮定される問題に対し、一方では、その理念型を構成する内在的機能や形態的諸要素の用語の抽象が、各論者の間で「ズレと幅」を有している点から、他方では、この理念型を制御する「歴史」や「社会」といった現実の諸過程による影響を考察する視点が脆弱な点から、それぞれ「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」が内在する理論的陥穽を捉えていると言えるだろう。以下この視点から順に見ていきたい。

### ① 対象の分析が概念操作により解消

第一は、「博物館の内在的機能」と「博物館の形態的諸要素」とを構成する各種要素一たとえば「定義A」を引用するならば、「調査・研究」、「収集・保管」、「公開・教育」、「博物館資料」、「博物館施設・設備」、「博物館専門職員（学芸員）」、「博物館職員」、「利用者・市民」といった各要素一が、本来的には「歴史」や「社会」との連関において生成されてくるということがらが、こぼれおちてしまうことから派生してくる理論的問題である。伊藤寿朗は「機能主義博物館論批判」の文脈において、この問題を以下に総括している。

「博物館における機能というものを、それは常に歴史的な背景と条件とを前提として、それぞれの時代に合ったかたちでの活動が行われてきた。またその形態というのも同様に、それぞれの時代の社会関係に相対する形での働きが行われてきた」[3-2]

加えて伊藤寿朗は、「機能主義博物館論批判」の文脈において、「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」を自らに援用する博物館論者自身が、「博物館の内在的機能」と「博物館の形態的諸要素」両概念に内在されるこれら各要素ひとつひとつの用語を自覚的・批判的に考慮されることが少ない問題を、以下に指摘している。

博物館の内在的機能や形態上の基本要素は「論者によって多少のズレと幅をもち」[12]、「どのような項目に整理するかは、論者によって異なっている」[伊藤 1986：251]

すなわち「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」は、その論理を自らに援用する各論者自身によって「対象の分析が概念の操作によって解消」[14] されるという方法論的陥穽が内在している問題を、伊藤寿朗は捉えていたと言えるだろう。

各要素ひとつひとつの用語自体は、それら用語に含まれる意味の位相に相当な幅をもつ概念であ

る。伊藤寿朗は、「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」の論理を自らに援用する各博物館論者の間で「内的機能をどの段階でとらえるかという抽象化のレベルをめぐる、機能主義的方法の内部に混乱が生じている」[15-1] 実体を、『博物館学講座』[樋口清之・古賀忠道・徳川宗敬監修：1978 = 1979 = 1980 = 1981] を例に挙げて紹介している。

換言すれば、伊藤寿朗はここで、各論者が自らの捉える「博物館の内在的機能」や「博物館の形態的諸要素」を抽象化していく過程で、各論者同士の論理に差異が認められるにもかかわらず、各論者の「概念操作」によって、これら各種要素が「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」という理念型に回収されている様相を指摘していると読めるだろう。同時にこの事態により、本来的には「歴史」や「社会」といった連関性を付帯しながら生成されてくるこれら各種要素が、分析の対象としてあるがままに措定されないという問題を指摘していると言えるだろう。そして、伊藤寿朗は、「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」のこうした理論的・方法論的陥穽を「戦後博物館論の特質」として見出し、「伝統的博物館論」としてこれら博物館論を位置づけていくことになる。

## ② 機能主義的規定法自体が歴史を捨象し「博物館の内在的機能」の自己展開を繰り返す

第二は、「博物館を自己規定し定立しうる法則的追求」[4] の脆弱性が「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」の論理を自らに援用する博物館論者のうちに内在されている問題である。この点に関して、伊藤寿朗は「機能主義博物館論批判」の文脈において、いわゆる鶴田総一郎の「エピソード」についての博物館学は、「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」そのものを自己対象化し得ていない「思いつきの」次元から論立されている事態を捉え、「具体化したかたちで博物館の意味が問われたとき（中略）博物館プロパーとして理論的に分析批判ができなくなってしまった」[7-2] 1970 年代初頭の状況を以下に描出し、分析している。

「日本の博物館学は諸外国に劣らない（外国はむしろ博物館技術中心のため）といわれながら、その博物館学についての全体的な整理も充分には行なわれていないわけである。われわれとしては、思いつきの博物館学や、行政的な『ノリとハサミ』の博物館学を排し、これら諸文献の検討を通し、その体系をめざして自己客観化の努力を続けるべきだと思われる。」[4] 「本質的には（機能主義的規定法は—引用者）方法自体が価値実体、つまり歴史を捨象して成立しているからである。」[13]

さらに深刻であることは、1970 年代初頭より「博物館学」

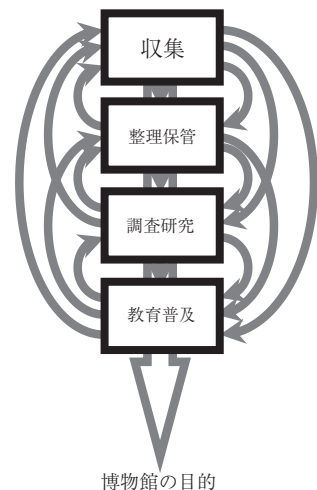


図2 「博物館の内在的機能」の自己展開

注) 図は鶴田総一郎 [1956: 40] 「大循環と小循環」より

が、自らの学問的・科学的追究を自己疎外し続けている実体が在るという上記の評価に加えて、【図2】に端的に表現されるように、「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」自体が、その初期より「制御理論の欠除」[14]した「内的論理の自己運動」[6-4]として現実社会に対して設計されているという、理論的問題である。「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」自体が歴史を捨象しながら「博物館の内在的機能」の自己展開を繰り返すという、自存的なこの理論的問題に対して、伊藤寿朗は次のように総括している。

「孤独な機能主義博物館論は、戦後の博物館のなかで（中略）その理念型のもつ緊張感の高さによって、進むべき方向を提示しつつ（中略）人畜無害の啓蒙的説教へと堕していく現実をどうすることもできなかった。」[17-1]

換言すれば、1970年代初頭以後、「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」自身が、自らを自己対象化して捉え返していこうとする契機が、喪失されているというのである。そして、この「現実」は、日本の博物館論において、ほぼ2000年代に至るまで継続していく。

### ③「博物館の内在的機能」のもつ社会的な契機や意味を考察していく視座の消去と限定

第三は、「機能主義が前提とした内的機能の孤独性」[15-1]の問題すなわち「理論自身において孤独な理論」が、現実の博物館や社会に対していかなる影響を与えていくのかという問題である。

伊藤寿朗は、ここまで見てきたように、「機能主義博物館論批判」の文脈において、「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」をもって「博物館が発展すれば世の中良くなる」という「素朴な啓蒙」型博物館論を問題視しており、その理論的限界に自らが「無自覚」であることに問題の所在を認めていた[14]。そして、日本の博物館が「博物館の内在的機能」の社会的な「価値的作用を消去・限定」[10]した論理へ発達していくに伴い、「機能主義博物館論（機能主義博物館論）」自身が抱え込むことになるであろう理論的問題に対して、以下に予見する。

「理想型の『閉じられた体系』内において、『ひと』、『もの』、『働き』、『ところ』の諸概念は完成され、完結されたものとして縦横無尽、向うところ敵無しの威力を発揮する。この体系の中ではすべてが批判でき、その批判の論理性は保障される」。この理想型は「まさに『閉じられた体系』ゆえにその規定論理をかたくなにこばみつづけるだろう。」[6-2]

「モデルとして組み立てられた、理念型からの距離によって、現実の博物館を評価するとき、それは常に必ず否定的対象であり、永遠に未成品である。」「それは対象とする世界に対し、閉じられた完結性の成立でもあった。他の論理を決して組み入れることのできない、そして自らを対象化する契機をもたない、閉鎖理論として自己完結されていく。」[12] [17-1]

そして伊藤寿朗は、こうして「博物館の内在的機能」のもつ社会的な契機や意味を考察していく視座を喪失した「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」は、「私的な学芸活動の領域を、合理的に進めるための補助機能」[17-3] 論へと限定されることで、その「対象とする世界」すなわち現実の博物館や社会においては「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」の「論理的必然」として、以下の理論的問題を提示してくることを警句的に予見する [10]。

「市民の自由で自主的な博物館への試みは、まさしく私的であるがゆえに未完成とされ（中略）市民の各分野にわたる自己創造の試みは、しかし博物館普及活動の対象として、すなわち奉仕の範囲に限定され、決して内在化されることはない。」[10]、「問題は職員の身の処し方という倫理的次元に矮小化され」[10]、「専門職の内容は、無反省のままに自己否定の契機を失ない、無限に肥大化されていく。」[17-3]「そこでの博物館実践とは（中略）没価値的な知識の具体化・普及化の作用を意味し（中略）その裏返しとしての社会教育的奉仕の粉飾をこらして行なわれるわけである」[10]

ここに予見された視座は、今日の日本社会そして博物館が抱え込んでいる構造的矛盾として顕現している。

## 2. 「ひと」と“もの”とを結びつける“はたらき”（鶴田総一郎）を博物館の本質とする見方に内在する理論的陥穽

続いて【図 1】で分節化された「定義 B」に関連する位相の問題である。伊藤寿朗は、自らの博物館論総体において、「① 各分野・各領域をもつ資料（情報も含む）を“もの”と抽象し、その属性や規定性を捨象」する論理、「② 社会的な諸関係に生きる人びとを“ひと”と抽象し、その属性や規定性を捨象」する論理、「③ 博物館の独自の役割を、この両者（“ひと”と“もの”-引用者）を結びつける“はたらき”とすることによってそのあり方を示そう」とする論理という、この三論理がそれぞれにおいて、属性や規定性や媒介性の徹底した捨象のうえに成立している点に「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」の理論的陥穽を捉えていたと言えるだろう<sup>(1)</sup>。

「歴史的規定性と媒介性、より正確には『ひと』も『もの』も商品として存在するという階級矛盾はシャ省されている」[5]、「今日の階級社会の複雑な網の目に組み込まれている人間を、その規定性と媒介性を捨象し、限定の倫理性をぬきに『ヒト』一般で、そして人間労働すらもが商品となるこの社会で、博物館資料を『モノ』一般でつつみこむ機能主義」[7-1] [9-1]、「しかしその物も人間も一般的、抽象的に存在しているわけではない。現実の諸関係に規定され、媒介されている物と人間である」[16]

以下、順番に見てみよう。

### ①「もの」の抽象とその属性や規定性や媒介性の捨象

「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」により定立される「もの」をめぐる問題は、犬塚康博[2000: 23]の鷹野光行博物館論[1999]批判で「博物館労働の物質的生産」の問題として別言され、規定されている。伊藤寿朗の「機能主義博物館論批判」の文脈に即せば、伊藤寿朗はこの「もの」を、端的に以下のように説明している。

すなわち「各分野・各領域をもつ資料・情報」は「人間生活にとって決して無媒介的・一般的・抽象的に存在しているわけではな」[1][16]く、「歴史的規定性と媒介性」[1]あるいは「現実のさまざまな諸関係に規定され、媒介されてはじめて存在」[16][17-1]する。この「もの」は、伊藤寿朗博物館論に即して別言すれば、「階級社会における社会的側面」[6-3]としては「その権力的要因と運動的要因との相互規定関係のしがらみの内で形成されてくる」[6-3]。そして、伊藤寿朗博物館論[1978: 24-42]において予見されたように、この「もの」は「矛盾に満ちた、しかもそれゆえに豊かな可能性を含」[17-1]んでいた。

そして伊藤寿朗は、「機能主義博物館論批判」の文脈において、「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」を演繹する論理のみでは、この「もの」の捉え方をめぐって、二つの理論的陥穽が存在することを一貫して指摘していた。

第一は、上記に把握したように「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」は、この「もの」の属性や規定性や媒介性を捨象して成立しているという陥穽である。

第二は、「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」の論理では、たとえば、伊藤寿朗博物館論により精確に即せば、1970年代初頭の歴史的に見た社会関係においては、「もの」が「商品として存在するという階級矛盾」[5][7-1][9-1]の存在は、「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」の主体的問題としては問われることはなかった旨を示唆しているように、具体的な社会関係下において完成される「資料」の問題を、上述の陥穽を内在した「もの」から／として捉えてしまう問題である。

### ②「ひと」の抽象とその属性や規定性や媒介性の捨象

「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」により定立される「ひと」をめぐる問題は、伊藤寿朗の「機能主義博物館論批判」の文脈に即せば、「地理的關係から、あるいはそれ以外の＜文化＞的諸要因によって、それ以外の地域とは相対的に独自の社会を構成する—それは資本主義の発展の中で変化をとげているが—＜地域社会＞という（中略）特質」[3-1]を内在する歴史貫徹的な「人間＝社会」という領域から抽象される問題として把握されている。すなわち【図1】に示すとおり、伊藤寿朗博物館論総体において「ひと」の属性領域は、「もの」の属性領域に対する基底に位置づけられていることがわかるだろう。それは、伊藤寿朗[1969]の「人間社会の動きと無関係に、それ自身自立している資料など存在しない」という言葉にも端的に示されている。またこの問題は、犬塚康博[2000:

23] の鷹野光行博物館論 [1999] 批判において「博物館労働の物質的生産の階級的次元」の問題としても規定されている。

伊藤寿朗は、「機能主義博物館論批判」の文脈において、「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」を演繹する論理のみでは、この「ひと」の捉え方をめぐって、二つの理論的陥穽があるという問題を、一貫して指摘していた。

第一は、上記に把握したように、「社会的な諸関係に生きる人びと」の属性や規定性や媒介性の捨象である。伊藤寿朗の「機能主義博物館論批判」の文脈から端的に把握すれば、この「ひと」は「人間生活にとって決して無媒介的・一般的・抽象的に存在しているわけではな」[1] [16] く「歴史的規定性と媒介性」[1] あるいは「現実のさまざまな諸関係」[16] をもって「はじめて存在する、矛盾に満ちた、しかもそれゆえに豊かな可能性を含」んだ人びとである。同時に、社会的な諸関係に生きる人びとは、歴史的現在における「階級社会の複雑な網の目に組みこまれている」[7-1] [9-1]。「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」は、この「ひと」の属性や規定性や媒介性の問題を捨象して成立しているという陥穽である。

第二は、「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」の論理では、現在の歴史的な社会関係下において形成される「資料」の問題を、上述の陥穽を内在した「ひと」から捉えてしまうという問題である。換言すれば、この論理では「誰が資料を創り、誰が選択するのか」[伊藤 1976] あるいは「いかなる市民か」[11] そして「『教育』を担う実体」[3-3] [11] といった「博物館の内在的機能」を行為する、具体的主体の実際の・社会的諸関係もしくは諸実践をめぐる価値の問題は検討されることなく捨象されてしまう。すなわち「資料を生み、支え、そして価値づけていく実体的な人間の問題」[18] は問われることなく、「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」の名のもとに矯正されてしまうという理論的問題を内在している<sup>(2)</sup>。

### ③ 「“ひと”と“もの”とを結びつける“はたらき”」の抽象と伊藤寿朗博物館論における応答

「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」における「ひと」と「もの」の抽象化とその属性や規定性や媒介性の捨象という問題は、「ひと」と「もの」との等価値的結合に博物館の独自の役割を見出そうという鶴田総一郎博物館論の命題においても指摘できる。たとえば、その「はたらき」が行なわれる具体的「ところ」の属性や規定性や媒介性も、捨象して展開されるという理論的問題が「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」にはあることを、伊藤寿朗は「機能主義博物館論批判」の文脈で、以下のように指摘している。

「博物館の存在論的（目的）な視点からすれば、機能的には教育普及という点が、形態的には『ひと』と『もの』とを結びつける『ところ』としての働きという点が問題とされてきた。まさにこの点において博物館は社会教育機関として位置づけられてきたわけである」[3-2]「ここで第1に問題となるのは、博物館の目的は『ひと』と『もの』とを結びつけることではなく『教育』

であるとして提起されているが、むしろその『教育』そのものにおける博物館の位置という問題まで掘り下げるべきである。第2に（中略）それを担う実体の問題として追求されていかなければならない点であった」[3-3]「つまり、その博物館の背景となる社会の問題がスッポリと抜け落ちてしまった点である。」[3-4]

それでは、この“もの”と抽象する論理，“ひと”と抽象する論理、この両者を結びつける“はたらき”とすることによって博物館の在り方を示そうという論理が、それぞれ外在的諸条件の徹底した捨象のうえに成立しているという「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」のもつ理論的陥穽の存在に対して、伊藤寿朗は「機能主義博物館論批判」の文脈において、いかに回答していたのだろうか。

伊藤寿朗は、この「はたらき」の延長に博物館を位置づける鶴田総一郎博物館論を「博物館学」とみなす定義に対しては、「いまだ学的検証の論理を内在化せず、したがって学的対象としては主観的なものにすぎない」[8]と警句し、鶴田総一郎博物館論の命題に対して、次のようにその問題を把握していた。

「それらは人間生活にとって決して無媒介的に存在しているわけではなく、むしろその博物館の存在の意味を歴史において、そしてその場所としての現在社会においてこそ問われなければならないと考える」[1]、博物館は「合理的で首尾一貫したものではなく、その対象とする人間も資料も、実は矛盾した存在であるということから出発することを迫っているのではないだろうか」[15-2] [18]

というのも、ここまで見てきたように、鶴田総一郎博物館論によって定立される「ひと」も「もの」も決して無媒介的・一般的・抽象的には存在し得ないからだ。伊藤寿朗は「機能主義博物館論批判」の文脈において、この問題に対して、以下の視点から、その応答を模索していたと言えるだろう。

抽象的「ひと」と抽象的「もの」とは「われわれがそこ（現実の具体的地域社会—引用者）での博物館活動というものを見ていく場合区別されねばならない」[3-1]

敷衍すれば、それらは一つ一つの具体的時間と現実社会のさまざまな社会的諸関係の上に存在している。「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」の論理を演繹する行為ではなく「自らの主張が、同時に自己への批判を内在させる」[伊藤 1986 : 260] 論理となる、現実社会のなかの具体的博物館や具体的博物館実践の諸過程から帰納して博物館を語るという行為は、当該博物館や当該博物館実践の来歴に自らが関係し、その問題を背負い込み、自分自身が何者であることを開示する作業を要請する<sup>(3)</sup>。

伊藤寿朗は、1950年代日本の現実社会において「時代をこえることができた」[18]と伊藤寿朗博

博物館論が評価するところの鶴田総一郎「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」の完成も同様に、超歴史的存在ではなく、人間社会における歴史的所産であるのだと指摘した<sup>(4)</sup>。

「『ひと』にしろ、『もの』にしろ、また『行政』にしろ、生身の人間関係においてその位相は一つである。そして博物館もまた幻想をとりはらったときの生身の人間関係の歴史的所産であったことを理解することができるのである。」[6-3]

そしてこの点は、伊藤寿朗博物館論において次のように自覚され、今日に問われていく<sup>(5)</sup>。

「僕達が更に問題を深めなければならない点は、そういう固有の内在的論理というものをもっていところの博物館（機能主義博物館論—引用者）というのは、歴史的に、そして社会の中でどのような位置にあるのかという点である。」[3-2]

## 中 結

本稿は、ここまで、鶴田総一郎「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」に内在する理論的陥穽、すなわち伊藤寿朗が指摘するところの「機能主義博物館論批判」の中身を、前稿[栗山2009]の【表3】で整理した伊藤寿朗博物館論における鶴田総一郎「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」の問題把握の記述内容を基礎に、その問題を解明するために提起した2つの視点のうち、本稿では「理論自身において孤独な理論」の視点に基づきながら分析を進めてきた。

次稿では「現実の博物館において孤独な理論」の視点も加えながら検討を進め、伊藤寿朗博物館論が捉え返していた鶴田総一郎「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」の理論的問題を、引き続き把握していく。

※本稿は、2005年度早稲田大学教育学会における、栗山究「機能主義博物館論をめぐる一問題—伊藤寿朗博物館論の軌跡を辿ることを通して—」発表レジメを基礎に原稿化したものである。

注(1) この問題に関連して、金子淳[2001 = 2010]をあわせて参考。

(2) またこの視点は、前節で述べたように「価値実体、つまり歴史」[13]が捨象されているため「機能主義博物館論（機能主義的規定法）」の論理が発達したとしても、その論理を「必然化し、現実化した契機」も「常に不明」[13]であるという問題とも関連してくる。

(3) 福島在行[2007: 29]を参考。付言すれば、ここでの論点の一端を自覚的に引き受けていこうとする博物館論の萌芽が近年見られている。

(4) この問題に関連して、犬塚康博[1993: 47]、栗山究[2008]もあわせて参考。

(5) この問題に関連して、犬塚康博[2003 = 2010: 68]をあわせて参考。

## 引用・参考文献

- 福島在行 (2007) 「平和博物館と／の来歴の問い方—立命館大学国際平和ミュージアムが背負い込んだもの」, 『立命館平和研究』第8号, 29-38。
- 樋口清之・古賀忠道・徳川宗敬監修 (1978・1979・1980・1981) 『博物館学講座』全10巻, 雄山閣。
- 犬塚康博 (1993) 「満洲国国立中央博物館とその教育活動」, 『名古屋市博物館研究紀要』第16巻, 23-62。
- 犬塚康博 (2000) 「博物館学の喜劇」, 博物館史研究会『博物館史研究』No.9, 21-25。
- 犬塚康博 (2003=2010) 「木場-鶴田博物館論の発生史的検討 1930年代後半の自然博物館設立運動」, 浜田弘明編 (2010) 『平成19～21年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書 博物館学資料「鶴田文庫」の整理・保存及び公開に関する調査・研究』, 64-73。本稿は2010年の原稿を参照。
- 伊藤寿朗 (1969) 「『資料』の意味—東大闘争によせて」, 法政大学博物館研究会『博物館研究会会報』第9号。
- 伊藤寿朗 (1976) 「市民の権利と現代博物館の課題—制度と権利の構造—」, 小川利夫編『教育改革シリーズⅦ 住民の学習権と社会教育の自由』, 勁草書房, 146-170。(小川利夫・寺崎昌男・平原春好企画, 姉崎洋一・長澤成次・辻浩編 (2000) 『日本現代教育基本文献叢書・社会・生涯教育文献集Ⅱ』第19巻所収, 日本図書センター)。
- 伊藤寿朗 (1978) 「博物館の概念」, 伊藤寿朗・森田恒之『博物館概論』, 学苑社, 3-48。
- 伊藤寿朗 (1982) 「昭和57年度博物館学授業について」レジメ。
- 伊藤寿朗 (1986) 「地域博物館論—現代博物館の課題と展望」, 長浜功編『現代社会教育の課題と展望』, 明石書店, 233-296。
- 金子淳 (2001=2010) 「戦後日本の博物館学の系譜に関する一考察」, 浜田弘明編 (2010) 『平成19～21年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書 博物館学資料「鶴田文庫」の整理・保存及び公開に関する調査・研究』, 58-63。
- 木場一夫 (1949) 『新しい博物館—その理論と教育活動』, 日本教育出版社 (伊藤寿朗監修 (1991) 『博物館基本文献集』第12巻所収, 大空社。小川利夫・寺崎昌男・平原春好企画, 山口源次郎・君塚仁彦編 (2001) 『日本現代教育基本文献叢書・社会・生涯教育文献集Ⅵ』第57巻所収, 日本図書センター)。
- 栗山究 (2007) 「日本における『機能主義博物館論』の一展開—伊藤寿朗博物館論の視点から (前編)」, 『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊15号-1, 137-147。
- 栗山究 (2008) 「日本における『機能主義博物館論』の一展開2—伊藤寿朗博物館論の視点から (中編)」, 『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊16号-1, 73-83。
- 栗山究 (2009) 「日本における『機能主義博物館論』の一展開3—伊藤寿朗博物館論の視点から」, 『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊17号-1, 97-111。
- 鷹野光行 (1999) 「博物館の機能再考」, お茶の水女子大学社会教育研究会編『人間の発達と社会教育学の課題』, 学文社, 24-39。
- 鶴田総一郎 (1956) 「博物館学総論」, 日本博物館協会編『博物館学入門』, 理想社, 10-122 (伊藤寿朗監修 (1991) 『博物館基本文献集』別巻所収, 大空社, 1-117。小川利夫・寺崎昌男・平原好春企画, 山口源次郎・君塚仁彦編 (2001) 『日本現代教育基本文献叢書・社会・生涯教育文献集Ⅵ』第56巻所収, 日本図書センター)。
- ※伊藤寿朗博物館論における「機能主義博物館論批判」の文脈である [1] から [18] までの書誌情報は [栗山2009] を参照のこと。